

## SGH 5年間, WWL 3 + 1年間のとりくみから見えてきた 課題探究学習の2つの方向性

広島大学附属福山中・高等学校  
下前 弘司

Two directions for inquiry-based learning: The results of 5 years of SGH and 3 years of WWL + 1 year's efforts

Hiroshima University Junior and Senior High School, Fukuyama  
Koji Shimomae

Abstract: Hiroshima University and Hiroshima University High School, Fukuyama promoted an issue-based research program under the designation of SGH (Super Global High School) and WWL (World Wide Learning). We will introduce two directions of problem inquiry learning, "Scientist Training Type inquiry-based learning" and "Journalist Training Type inquiry-based learning," that have emerged from these programs. In order to tackle social problems, it is important to have the will to "do something" and "try what we can" even when the problems are unpredictable, complex, or difficult to solve. Essential here is the concept of accountability. Hiroshima University High School, Fukuyama defined accountability as "the awareness to face reality, to find issues to be solved, to consider oneself as a party to social problems, and to act proactively on one's own volition to solve problems." We need to develop educational programs that help people break free from the opposite of this victim consciousness and indifference. We also believe that it is important to be aware of the direction of inquiry learning, which is Scientist Training Type and Journalist Training Type.

Key words : inquiry-based learning, accountability

### I. はじめに

広島大学附属福山中・高等学校では, SGH (スーパー・グローバル・ハイスクール) 5年間, WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) 3年間および WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業2年間における課題探究学習の取り組みを, 次の3つの方針のもとで実践してきた。

- ・生徒全員が, 何らかの課題探究を1年間通して実践する。
- ・グループ探究, 個人探究の両方を体験する。
- ・生徒自身が, 各自の関心に沿って自由に探究課題を設定する。

そして, 年度ごとに研究開発の目標・課題設定を進めながら, 取り組みを進めてきた。我々が見出した研究開発の目標をまとめると, 次の4点になる。

- ・意欲が低い生徒の意欲をどう引き出すかを研究する。
- ・特殊なプログラムがなくても実践できるような提案をする。
- ・どんな学校でも参考になるような研究報告を目指す。
- ・学術的・学際的な課題探究学習を目指す。

そして, これは「生徒のつまずき研究」というかたちで方向性が定まり, 課題探究学習プログラムにおける生徒のつまずきと教師のサポートを一対一対応で確認できるようにまとめた『研究開発課題研究指導事例集』を発行するに

至った。

その中で明確になったのが, 「探究課題を設定することに最もエネルギーを注ぐべきで, 課題設定がうまくいかどうか, 取り組みの成否を分ける。」ということであった。そして, 「限られた時間の中で, 生徒に過負担とならないようにしつつ, しかも生徒が達成感や手ごたえ, 成長の実感を得やすい取り組みにする必要がある。」ということ意識してプログラムを構築することが必要だという意識を教師が持たなければならぬということも改めて確認することができた。

そんな中で意識するようになったのは, 「学術的・学際的な課題探究学習」以外の課題探究学習があるのではないかと, ということであった。これは, 広島大学附属高等学校が公表されている「広大メソッド」という課題探究の手引き書に触れたことが大きく影響している。広大メソッドは SSH (スーパー・サイエンス・ハイスクール) のもとで培われたものです。「広大メソッド」を読み込むほど, その完成度の高さを感じると同時に, これにはうまく当てはまらない課題探究があるのではという疑問を感じた。そこでたどり着いたのが, 「サイエンティスト養成型課題探究学習」と「ジャーナリスト養成型課題探究学習」という, 課題探究学習の2つの方向性であった。前者は「学術的・学際的な課題探究学習」や「広大メソッド」に対応するもので, 後者は附属福山で取り組んできた IDEC-IGS 連携プログラムや WWL 高校生国際会議から見えてきたことに対応するものである。

## II. IDEC-IGS 連携プログラムから見てきたこと

IDEC-IGS 連携プログラムは、旧広島大学大学院国際協力研究科 (International Development and Cooperation : IDEC) の留学生や広島大学総合科学部国際共創学科 (Department of Integrated Global Studies : IGS) の学生とともに、異文化を背景とする人たちと英語で議論したり、合意形成したりするプログラムである。主に発展途上国を取り巻く社会的課題について学び、英語で議論する機会として WWL 連携校を含めた生徒に案内し、実施している。学校の枠を越えた研究グループを結成し、課題研究を進めるのが特徴で、夏休みに連携校の生徒を附属福山に招き、グループごとに研究テーマの選定を含めた研究合宿を行ってきた。年5回と夏合宿から構成されるプログラムで、その概略は次の通りである。

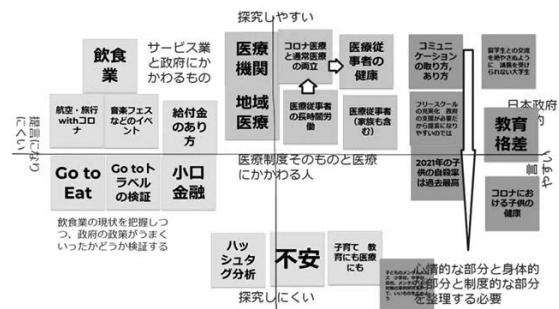
- ① IDEC の留学生による研究発表を聞き、ディスカッションを行う。(第1回・第2回)  
社会的課題を解決すべく探究する人の熱を感じることを主な目的としている。  
IGS の学生をサポートとして配置し、英語のサポートだけでなく、どんな質問をしたらディスカッションになっていくのか、手本を見せてもらうことで、高校生の学びを充実させている。
- ② 希望調査に基づき平和、環境、都市問題、バイオマスの4グループ(年によってテーマが変わることがある)に編成し、学校の垣根を越えた研究チームを結成する。
- ③ 研究チームごとにオンラインミーティングを開催。  
生徒の希望を整理して研究テーマを絞り込み、今後の準備を促す。
- ④ 夏の研究合宿(2022年度は宿泊なし)  
可能な限り対面で話し合い、研究テーマを確定させていく。日本語で研究テーマと研究方法のプレゼンを行い、意見交換をする。
- ⑤ 生徒による研究中間報告(英語)(第3回・第4回)  
IDEC 留学生と IGS 学生及び高校生が、発表グループに対して質問を投げかけ、ともに研究をブラッシュアップするにはどうすればいいかを議論する。単なる批評にしないことを心がけている。参加者全員が研究内容に対して他人事にならないようにするための方法である。その結果か、高校生は参加者を心強い仲間と認識するようになり、自分の研究に対しての思いが育ってくるため、感情のぶつかり合いが発生する。自然科学的な研究ではなく社会科学的研究が中心になるため、「どうすべきか」という価値判断の議論に進むと、価値観の対立が発生し、それが感情のぶつかり合いに変化することがある。もちろん、教員と参加者がケアをするが、こういう経験が異文化交流の深さにつながるものと考えている。
- ⑥ 生徒による英語での研究発表  
研究の最終発表は、より多くの留学生・学生と交流でき

るように広島大学で、できるだけ対面で実施している。高校生と IDEC 留学生・IGS 学生を交互に配置し、常に留学生・学生と高校生が交流できるようにしている。ここまでくると、高校生が英語で質問を積極的にするようになる。それは、他グループの研究をともに創ってきた経験、どんな話・質問をすれば深まるかについての経験があるからである。英語力、学術的な深さ・正確さとは違う大事な要素がここにあるのではないかと考えている。

## III. WWL 高校生国際会議から見てきたこと

IDEC-IGS 連携プログラムの経験を活かし、広島大学の留学生と直接英語でディスカッションすることを目指して、高校生国際会議を企画することにした。AL ネットワーク会議等で実施に向けた議論を重ねる中で、参加者が探究する共通テーマが必要で、しかもそのテーマがかなり絞り込まれて何をすれば成果が出るのかが明確なものにしなければならぬという意見が出た。確かに一理あるが、附属福山では生徒が自らテーマ設定することにこだわってきたので、最初から絞り込んだテーマを示すことには抵抗があった。そこで、テーマの大枠だけ決めておいて募集をかけ、生徒が探究したいことを持ち寄って、生徒自身が探究テーマを絞り込んでいくという方法を採用することにした。設定したテーマの大枠は、「新型コロナウイルス感染症対策」とした。また、新型コロナウイルス感染症によって、数多くの方々が平穏な日常生活を失い苦しんでいる方々に思いを寄せ、日本政府へ政策提言するという方向性をもたせた。附属福山と連携校の高校生に募集をかけ、次のようにプロジェクトは進行していった。

- ① 4月下旬 連携校に向け、高校生国際会議に関するオンライン説明会を複数回実施した。
- ② 5月上旬 参加者募集締め切り  
福岡県立小倉高等学校5名、広島市立舟入高等学校4名、広島県立福山誠之館高等学校6名、福山市立福山高等学校6名、広島大学附属福山高等学校6名 合計27名が集まった。
- ③ 5月中旬 参加者とのオンラインミーティング(2回)  
参加者各自の関心事をもとに、探究テーマの絞り込みを進め、グループ編成案を生徒とともに作成した。次の図は、探究テーマの絞り込みをしていく過程で作成した Jamboard の資料である。



参加生徒との熱い議論の結果、経済・医療・教育の3分野、各2グループずつ設定し、合計6グループ編成にすることとし、さらなるテーマの絞り込みは各グループで進めていくことになった。それは生徒が、関心のあるテーマはあるけれど、それに関して知識を増やしていかないとテーマの絞り込みさえできないという認識に至ったからである。そして、せっかくだからテーマの絞り込みを自分たちの力でやりたいと言ったからである。あらかじめ短期間に成果を出しやすいテーマを教師が設定する方が運用は楽だが、いかにテーマ設定するかが課題探究の成否を分ける最重要ポイントなので、やはりテーマ設定を生徒自身にさせるべきだと考え、茨の道を進むことにした。生徒自身がテーマ設定をすることは、納得感と責任感を持って探究を進めることにつながる。モチベーションの素だといえる。

④5月下旬 グループ編成、事前学習用コンテンツの紹介  
事前学修用コンテンツとして、広島大学名講義100選や公的機関の提供する情報を紹介した。生徒自身が様々な情報を収集し分析していく様子が見られ、モチベーションの高さは自主性・主体性そのものだということが確認できた。

⑤6月中旬 グループ別オンラインミーティング  
経済・医療・教育の各2グループずつ、計6グループのメンバーがそれぞれオンラインで集まり、各自が事前学修した成果を持ち寄って、さらなる研究内容の調整・絞り込みを進めた。そして、夏の研究合宿に向けて、今後の課題を確認した。

⑥講演とディスカッション  
新型コロナウイルス感染症対策の最前線で活躍しておられる研究者、社会人からお話を聞き、対話する機会を設定した。

- ・6月22日 広島大学大学院医系科学研究科  
坂口 剛正 先生 オンライン
- ・7月5日 広島大学大学院人間社会科学研究科  
角谷 快彦 先生 オンライン
- ・7月6日 こだまクリニック院長、前福山市医師会会長  
児玉 雅治 先生 対面、オンライン

対策の最前線で活躍する方々と交流することで現実を想像する力を養い、研究内容のリアリティを高めることを目的に実施した。事前学習がある程度進んでいたからか、対話が活発に行われた。

⑦7月9日・10日 研究合宿  
事前学習の成果を持ち寄り、まずは研究の方針をグループごとに決めさせた。その後、ディスカッションとリサーチの繰り返しにより、研究を深めていく作業を続けた。

その中で特に意識させたのは、ニーズステートメントである。ニーズステートメントは医療の現場で活用されており、患者やその家族の意見を医療の改善につなげる手法と

して注目されているもので、現場の課題をニーズのかたちで表現する手法である。現場の課題解決の方法を「Yにとって、Zをもたらすために、Xする方法」と表現する。

「Yにとって(Population)」は、対象となる人をイメージし誰のための提言かを考えることである。「Zをもたらすために(Outcome)」は、どのような価値をもたらしたらよいか、どんな苦痛・弊害を取り除くのかを考えることである。「Xする方法(Problem)」は、既存の課題を解決するために何をしたいのか、何を要求するか、解決策をどうするかを考えることである。

国際会議に向けた探究では特に「Yにとって」を強く意識させた。困難を抱えている人の現状を直視し、それを受け止め、それを自分の言葉で表現することを重視したのである。それは、「Zをもたらすために(Outcome)」が根本的な問題解決につながる内容となるようにするためには、「Yにとって」の深さと正確さが必要だと考えたからである。この両者がきちんと描けてこそ「Xする方法」すなわち解決策だと思うからである。広く社会問題として認識されている事象を深く掘り下げず、その問題に関わる「人」をイメージすることなく、世に出回る情報を編集して解決策をまとめるという表面的な探究にならないようにするためには、「Yにとって」が肝要である。ここから、困難を抱えている人、そして社会問題の解決に向けて尽力している人に寄り添い、代弁者として正確な情報に基づいて解決に向けた変化が起きよう支援を世に訴えるというような探究のあり方、すなわち学術的・学際的な課題探究とは違う要素を持った探究のあり方があるのではないかと考えるようになった。

⑧高校生国際会議  
2022年7月31日、広島大学構内にあるサタケメモリアルホールで国際会議を開催した。下の資料は、国際会議の様子をまとめたものである。



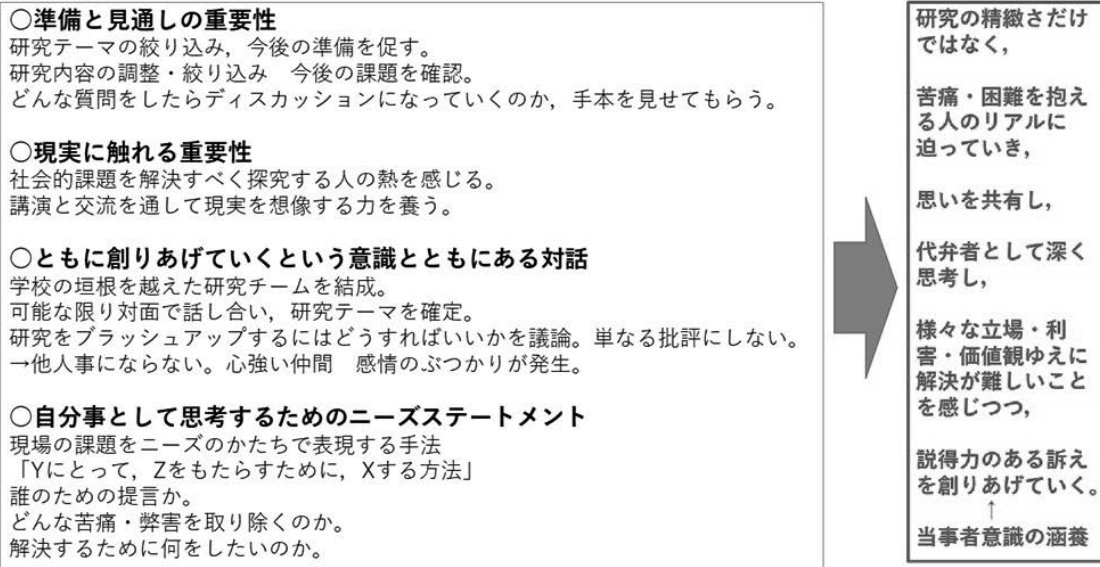
英語で研究発表するだけならば、事前の準備次第でどうにかなる。一方、英語力に長けた生徒を集めているわけではなかったのに、留学生とその場でしかも英語でディスカッションするというのは難題であった。しかし、即答はできなかったが、回答をメンバーで協議して見事に受け答えができた。ニーズステートメントを意識し、誰に向けて何をどのように伝えたいかを丁寧に考えて発表したからその成果だと考えている。

の他様々な取り組みを続ける中で見いだした、生徒による主体的な課題探究に必要な要素を次のようにまとめた。

#### IV. 課題探究学習における2つの方向性

IDEC-IGS 連携プログラムやWWL 高校生国際会議、そ

### 対話を中心としたWWL課題探究プログラムから考える



そして、課題探究学習の方向性として、「研究の精緻さだけでなく、苦痛・困難を抱える人のリアルに迫っていき、思いを共有し、代弁者として深く思考し、様々な立場・利害・価値観ゆえに解決が難しいことを感じつつ、説得力のある訴えを創りあげていく。」ということを考えるようになった。

ここから見いだしたのが、課題探究学習における2つの方向性である。

#### ①サイエンティスト養成型課題探究学習

主に自然科学的な探究にあてはまるもので、解決すべき課題が明確である。思考と実験、検証の繰り返しが基本になる。広島大学附属中・高等学校の「広大メソッド」が最たる例である。附属福山でも長く、サイエンティスト養成型といえる探究のあり方を研究し続けている。

#### ②ジャーナリスト養成型課題探究学習

解決すべき課題が複雑で多様なステークホルダーが存在し、様々な希少性を意識せざるを得ない社会科学的な探究課題を扱う場合によくあてはまる。解決策実現には制度変更・予算獲得等が必要で、それには支持者を増やし、議会で多数を得ることが欠かせない。よって、問題の深刻さ・重大さ、優先順位の高さについていかに根拠をもって合理的に語れるかが重要になる。

社会問題をしかもグローバルな社会的課題を探究するとき、自然科学のように精緻で明解で反証可能性に富む探究であるべきなのは間違いないが、解決すべき課題が複雑で

何が根本原因なのかが不明瞭な場合、探究はうまくいかない。これまで主に課題探究といえば①サイエンティスト養成型であった。これからは②ジャーナリスト養成型も意識する必要があるのではないかと考えている。両者の特徴を整理し、両方のアプローチができるようにすることが重要なのではないかと考えているのである。このとき、論理的・合理的思考、クリティカル・シンキング等、学術的・学際的なアプローチだけでなく、「自分が社会問題にどう関わっているか、自分には何ができるか（何をしたいか・すべきか）」という当事者意識が必要なのではないかと思う。

広島大学附属福山中・高等学校における課題探究学習の積み重ねにより、生徒を研究者に見立てて課題探究の方法などを身に付けさせながら、いわゆる「深い学び」を実現してきたが、一方でなかなか学びが深まっていけない生徒、課題探究のスタートでつまづいたまま前進しかねている生徒、学びの意義をつかみ切れていない生徒が出てくるなど、教師にとって様々な問題が浮き彫りとなっていた。この問題を克服するためのキーワードが「当事者意識の涵養」である。わかりやすさ、とっつきやすさは意欲の向上につながるが、それだけでは不十分である。VUCA時代と称される社会に対峙するためには、予測が難しくても複雑で難解であったとしても、どうにかしなければ・自分にできることをやりたいという意思が重要である。

ここで欠かせないのがアカウンタビリティという概念である。アカウンタビリティを「現実を直視して解決すべき課題を見だし、自分が社会問題の当事者であると考え、課題解決に向けて自分の意志で主体的に行動しようとする

意識」と捉え、この対極にある被害者意識・無関心から脱却することにつながる教育プログラムの開発が必要なのではないかと、そして、①サイエンティスト養成型とともに②ジャーナリスト養成型という探究学習の方向性を意識することが重要となるのではないかと考えている。アカウンタビリティは必然的に全世界とつながっていくものであるから、様々な立場の当事者とともに課題を共有し、ともに解決に向かう必要がある。すなわち、「責任の共有(ジョイント・アカウンタビリティ)」になっていくのである。だからこそ、生徒と教員および生徒間での協働の学びという対話が必要になる。自分という枠を越え、学年・学校という枠を越え、国という枠を越えて対話する機会をつくることが求められるわけである。そこで例えば、生徒自身が様々な社会問題の当事者であるという自覚をもつことを「かかわり」(engagement)とし、課題解決に向けて自分の意志で主体的に行動しようとするを「はたらきかけ」(action)とするなど、「当事者意識をもって主体的に課題探究すること」に必要な観点を整理することを考えている。そして、

この観点に基づいて、エモーショナルな力を育成しながら総合的な学習・探究の時間を中心とした、各学年・発達段階に応じた課題探究学習の在り方を検討し、従来の課題探究プログラムを見直し更新していく。

WWL3年間は課題探究のありかたを見直すいい機会となった。WWL個別最適な学習環境の構築でも十分な成果が上げられるよう、様々な成果をふまえて研究開発に尽力していきたい。

#### 参考文献

- 碓氷悟史 (2001) 『アカウンタビリティ入門』中央経済社
- ロジャー・コナーズ他 (著) 伊東守 (監訳) (2009) 『主体的に動くアカウンタビリティ・マネジメント』ディスカヴァー・トゥエンティワン